富良野市役所

富良野市が紡ぐ「ただいま」と言えるワーケーション



業種	公務・公共
従業員規模	101-300名
課題	地域活性化、エンゲージメント向上

富良野市役所は、莫大な維持費を要する専用テレワーク施設を建設せず、市内の民間カフェや宿泊施設などの既存インフラを活用。企業の人材育成合宿、半農半X、親子滞在、転職なき移住支援など、滞在者の目的に応じた7つの助成メニューを展開しています。家計簿方式による地域消費額の可視化や徹底した伴走型PDCAを実施。その一環として、株式会社リコー等の企業と連携した「事業課題共有型ワーケーション」を試行するなど、単なる観光誘致を超えて外部人材と地域事業者が深く交わる関係人口の創出を実現しています。





■ 挑戦：観光の繁閑格差、人口減少、そして箱モノ建設に伴う将来負担リスク

富良野市はラベンダーが咲き誇る夏季と、パウダースノーを目当てにスキー客が訪れる冬季に需要が集中する通年型リゾートである一方、春（4月から5月）や秋（10月から11月）のオフピークにおける集客低下と雇用の安定確保が長年の構造的課題でした。また、急速な少子高齢化に伴い、基幹産業である農業や観光業の担い手不足・事業承継難が顕在化していました。
ワーケーション受入にあたっては「専用の大型ハード施設を建設すべきか」という選択肢もありましたが、国の補助金で初期投資を抑えたとしても、将来にわたる維持管理費・光熱費などのランニングコストが市の重荷になるリスクを懸念。さらに、国内外から同市に訪れる観光客に加え、地域の事業者や住民と深く関わり、中長期滞在や再訪につながる「質の高い関係人口」をいかに創出するかが大きな課題となっていました。

■ 独自戦略：ハード整備に頼らない既存資源活用と、目的に応じた多角的な受入設計

富良野市は専用のハコモノを作らず、市内のカフェや宿泊施設、既存オフィスの一部にWi-Fi強化や電源確保といった小規模な改善を促す「民活・既存施設活用」の方針を貫きました。そして、3年ごとの制度見直しを経て、滞在者のニーズに合わせた柔軟な支援メニューを体系化しました。

＜令和８年度 富良野市「ワーケーション展開費用助成金」＞

1.子育て世代向けワーケーション・移住体験支援事業
将来の移住・二地域居住を見据えた家族向けに、14泊以上の滞在費やレンタカー代、保育料、体験教育費の一部を助成

2.転職なき移住者向けワーケーション・移住体験支援事業
現職をリモートで継続しながら移住を検討する20～50代を対象に、14泊以上の家賃(宿泊費)やレンタカー代の一部を助成

3.半農半Ｘワーケーション体験支援事業
午前中に市内で農作業体験に従事し、午後にテレワークを行う「半農半X」滞在の旅費を定額助成

4.サテライトオフィス進出検討視察支援事業
地域課題解決や新規事業創出、拠点進出を検討する企業等の視察旅費を定額助成

5.人材育成・チーム合宿ワーケーション実施支援事業
社員研修やチームビルディングを目的とした企業合宿に対し、旅費の一部を定額助成

6.ワーケーション実施支援事業
市内宿泊施設に4泊以上滞在し地域貢献やゼロカーボン推進等の体験プログラムに参加する社員等の旅費を助成

7.移住・ワーケーション体験ツアー参加支援事業
市や地域おこし協力隊が企画・運営する募集型体験ツアーへの参加旅費を定額助成

これらの枠組みの中で、企業ニーズと地域課題を深く結びつける実践例として、株式会社リコーや北海道武蔵女子大学と連携した「事業課題共有型ワーケーション」なども実施。大企業のビジネス視点と学生の柔軟な発想を掛け合わせ、地域の中小事業者の現場へ外部人材が踏み込む共創型のプログラムを実証的に展開しています。





■ 成果：滞在期間の長期化、地域消費の可視化、そして外部人材による課題解決の芽

ターゲットを明確化した制度再編により、親子層や転職なき移住希望者といった2週間以上の中長期滞在者が着実に増加しました。滞在者に家計簿形式で支出を記録してもらうことで、助成金支給額を上回る市内消費効果を係数・数値データとして客観的に可視化し、市民や市議会への説明責任を果たす事業基盤を整えています。
また、人材育成合宿の一環として行われた株式会社リコー連携の事業課題共有型ワーケーションでは、市内3事業所（令和８年度：株式会社ふらの農産公社・活版印刷長岡屋・ペンションあしたや）のリアルな経営課題に対し、外部視点から労働環境改善やインバウンド向け体験、オフピーク集客などの具体的プランが提案されました。都市部の参加者にとっては日常業務から離れた越境学習による視野拡大とエンゲージメント向上につながり、受け入れ側にとっては地域課題解決の新たな発想を得るという、双方にとって実質的な成果を生み出しています。

■こだわり：「人に恋する」手厚い伴走と、行政依存を防ぐ自走化への配慮

富良野市役所の松野氏は、地方テレワーク・ワーケーションの来訪者一人ひとりに対して「恋をする」熱意で向き合っています。来訪前のオンライン面談やSNSでのやり取りを通じて不安を解消し、滞在中のきめ細かなフォロー、滞在後の体験記収集までを一貫してケア。体験記にはあえて「課題」欄を設け、受入環境の向上を目指し、速やかに改善できる点は即座に手を打つなど、PDCAサイクルを徹底しています。同時に、企業向けプログラムにおいては、行政が送迎や段取りをすべて無償で抱え込んで企業側を甘やかすことのないよう配慮。将来的に地元の民間事業者や地域商社、NPOなどが主体となり、適正な対価を得て自走できる持続可能なビジネスモデルへの移行を見据えた役割分担を常に意識しています。



■苦労：「モニター調達」の泥臭い対応と、官民連携の定着に向けた試行錯誤

事業初期には、滞在者から急遽「デュアル画面で仕事をしたいのでモニターを貸してほしい」と相談されたものの、役所に在庫はなかったため、当時は市内のパソコン取扱事業者から有償レンタルし、現在は市で貸出用モニターを所有するなど、現場のニーズに応える細かな改善を積み重ねてきました。また、移動手段となる二次交通の不足や個室ワークブースの不足といった課題に対しても、行政が独断で整備するのではなく、宿泊施設や近隣町との対話を重ねる中で、民間事業者が自主的にワーク環境を整えるなど段階的な解決を図ってきました。さらに、企業連携プログラムが軌道に乗るにつれ、行政と企業の「なれ合い」に陥ることなく、いかに地域全体を巻き込んだ仕組みへ昇華させるかという挑戦を続けています。

■未来：市民全体で迎え入れるコミュニティの形成と環境資源ツアーの構想

今後は行政窓口に頼るだけでなく、市民や地域事業者が自然体で来訪者を迎え、「ただいま」「おかえり」と言い合える緩やかな受入コミュニティの形成を目指しています。来訪者の持つ専門スキルが地域で必要とされ、居場所が見つかることで、二地域居住やローカルベンチャー創業へと結実する土壌を整えていきます。また、NPO法人 富良野自然塾での森林再生、環境教育活動や市内14種類の徹底したごみ分別といった環境施策を活かし、ごみ収集車への同乗から処理場への運搬、資源リサイクルの副産物による温浴施設の熱利用、土づくりまでをストーリーとして体験する「循環型サステナブル・ワーケーションツアー」など、富良野ならではの地域資源を掘り下げた新たな滞在価値の創出を検討しています。





■メッセージ：「無地のキャンバス」に恐れず描き、自地域ならではの小さな試行を



顔の見える関係を紡ぐ
富良野市役所の松野氏

地方テレワーク・ワーケーションの受入は、地域ごとにヒト・コト・モノの環境が異なることから、先進地を参考にしつつも模倣することなく、「無地のキャンバス」に絵を描くように、自らの地域や産業が持つ強みや弱みを見つめ、失敗を恐れずにスモールな受入企画や事業を実施することが大切です。利用者の声に耳を傾けトライ＆エラーを繰り返しアップデートするなど、めげずに継続した取組が受入地域の確立と関係人口創出にも繋がっていくかと思います。また、地域や企画（事業）をPR（＝売る）ことも大切ですが、「この地域に行ったら、この人がいる。」と言った、受入を推進・コーディネートするキーマンを育て、売り込むことで存在感を高め、利用者に安心感を与えることも重要はないでしょうか。

■富良野市役所 ワーケーションフラノホームページ：https://furano-workation.com/

■日本テレワーク協会職員による富良野ワーケーション体験記 note
https://note.com/japan_telework/n/neb823eae78c2

■特別レポート：富良野市×リコー×北海道武蔵女子大学「事業課題共有型ワーケーション」

令和8年10月5日～9日の4泊5日の日程で。「リコー×北海道武蔵女子大学の事業課題共有型ワーケーション」が実施されました。この取り組みは、従来の余暇を目的としたリゾート滞在にとどまらず、地域が直面するリアルな経営・事業課題の解決に挑む実践的なプログラムです。期間中、リコーの社員と北海道武蔵女子大学の学生がチームを組み、市内の宿泊施設、食品製造現場、印刷工房といった多様な現場を視察・ヒアリング。企業のビジネス視点・論理的思考と、学生の柔軟な発想・生活者目線を掛け合わせ、現場の課題に対する具体的な解決プランを立案しました。最終成果発表会では事業者への提案と率直な意見交換が行われ、外部人材の越境学習と地域の関係人口創出を両立させる新たな共創モデルの可能性が示されました。

■株式会社ふらの農産公社

チーズ製造現場の労働環境とやりがい還元に着目。体験型インターンや地域イベント連動による成果実感の創出を提案しました。現場目線に立ち、働き手の誇りに直結する仕組みとして高く評価されました。





・リコー社員の体験記はこちら（富良野市役所 ワーケーションフラノ）
https://furano-workation.com/furano-workation-vol-142/

■活版印刷 長岡屋

デジタルに対するアナログの優位性を探究。インバウンド向けに名前を漢字に当てはめて印刷する体験プログラムを提案しました。情緒的価値と文化体験を融合した着眼点に事業者は共感し、前向きに受け止めました





・リコー社員の体験記はこちら（富良野市役所 ワーケーションフラノ）
https://furano-workation.com/furano-workation-vol-141/

■ペンション あしたや

閑散期の集客減と人手不足が課題でした。学生向け体験合宿や自然を活かしたデジタルデトックス滞在を提案。事業者は新販売軸として評価しつつ、全国どこでもできる企画にしないよう富良野独自の物語を込めた発信を助言しました。





・リコー社員の体験記はこちら（富良野市役所 ワーケーションフラノ）
https://furano-workation.com/furano-workation-vol-140/




行政が単なる観光客誘致に終始せず、地域事業者と都市部企業を丁寧につなぐことで、
テレワークやワーケーションが「地域課題解決の共創基盤」として機能することを実証した取り組み